

アカデミック・ライティングのための自他の対応の再学習

—漢語サ変動詞を中心に—

庵 功雄(一橋大学)

1. はじめに

自他の対応¹は初級で取り上げられ、多くの日本語学習者(以下、学習者)が難しいと感じている文法項目である。しかし、実際は、初級で取り上げられている内容だけでは日本語の自他の全体像はわからない。本発表では、中上級レベルで取り上げるべき自他に関する内容を指摘した上で、「初級文法項目の再学習」という観点およびアカデミック・ライティングとの関連から、漢語サ変動詞の自他について新たな提案を行う。

2. 初級で扱われる自他の対応

自他の対応は初級文法の定番項目だが、そこで主に取り上げられているのは、(1a)(1b)のような格助詞の選択や(2a)(2b)のような自動詞形、他動詞形の選択の問題である²。ここで、自動詞には動作主は含まれず、出来事が自然発生的に表現されるのに対し、他動詞には動作主が含意されることも合わせて教えられる。

- (1)a. 電気()つきます。(「が」)
- b. 電気()つけます。(「を」)
- (2)a. 窓が(閉)。(「閉まります」)
- b. 窓を(閉)。(「閉めます」)

こうした形態論的な練習が不要だとは言えないが、少なくとも、(1)(2)のタイプの問題に正しく答えられたとしても、それだけで「自他の対応」が使えるようになったとは言えない。

3. 学習者にとってわかりにくい日本語の自他の対応

本節では、学習者にとってわかりにくい(したがって、産出しにくい)自他の対応の例を取り上げる³。

- (3) (電車のアナウンス)
 - a. ドアが閉まります。ご注意ください。
 - b. ドアを閉めます。ご注意ください。
- (4) (かたい蓋が open したのを見たとき)
 - a. あっ、開いた!
 - b. あっ、開けた!
 - c. あっ、開けられた!(Cf. 小林 1996)
- (5) この辺にも新しい建物が{a. 建ちました b. 建てられました}ね。(Cf. 寺村 1976)
- (6) 先日トンネルが{a. 開通した b. *開通された}。(Cf. 庵 2010)
- (7) 今度田中さんと結婚する{a. ことになりました b. ことにしました}(Cf. Hinds 1986)

¹ 自他の形態的対応のパターンや初級における留意点については、庵ほか(2000)参照。なお、本発表で言う「自動詞」「他動詞」は特に断らない限り、自他の対応を持つ自動詞、他動詞のことを指すものとする。

² これに加えて、「ている」と「てある」の選択が「自他の対応」との関連で取り上げられるが、こうした取り上げ方は結果残存の「ている」の適切な産出を阻害するものであり、好ましくない。

³ 学習者は母語話者と同じように話す必要はない、という考え方は妥当だと発表者も考える。しかし、それはあくまで、母語話者の通常の使い方を学習者が知った上で、そうした使い方を目指すか否かを学習者自身が選択すべきものであり、(学習者に対して権力を持つ)日本語教師などが「母語話者のように話す(ことを目指す)べきではない」といった形の押しつけをすべきでない(庵 2013、菊地 2006 の議論も参照)。

(3)は電車の車内放送で使われる表現で、多くの鉄道会社では(3a)が使われている。しかし、こうした環境で他動詞的表現を用いるのが一般的な言語もあり、少なくとも、そうした言語の話者にとっては、仮に自他の対応のリストを見ながら話すとしても(3a)が産出できるとは限らない。

(4)の状況では「蓋を開けた人」は必ず存在するが、日本語ではその人の存在は無視され(言い換えれば「黒衣」的に扱われ)、(4a)の自動詞表現が使われるが、この状況では(4b)の他動詞や(4c)の他動詞の受身形を使うのが一般的な言語も多く、この場合も自動詞表現は産出しにくい。

(5)は寺村(1976)に見られる例で、上級(超級)レベルの英語話者は(5b)を使ったが、日本語では(5a)が自然だろうという寺村の指摘がある。

(6)は庵(2010)の調査文だが、日本語母語話者はほとんど受身形を選択しないのに対し⁴、上級中国語話者は約66.2%受身形を選択した。これも、トンネルの開通には動作主が不可欠という事態認識の反映であると考えられる。

(7a)はHinds(1986)においてわかりにくい(puzzling)例として挙げられているものの類例で、これを直訳した英語は「政略結婚」の意味でしか解釈できないという。

こうした例は多くの学習者にとってなぜ自動詞が用いられるのかがわかりにくいものだが、これらはごく一般的な日本語表現であり、この点からも、2節で見た、(助詞を含む)形態的な対応関係がわかっただけでは「自他の対応」が適切に「産出」できるようにはならないことがわかる⁵。これらは本発表の対象であるアカデミック・ライティングに直結するわけではないため、本発表では現象の指摘に留めるが、これらは中上級以上の文法指導において取り扱われるべき内容であると言える⁶。

4. 日本語のボイス体系と自他の対応

3節では中上級以上で扱うべき自他の対応についての例を取り上げたが、アカデミック・ライティングの観点から重要なのは、「漢語における自他対応」とも言うべき、形態論的な問題である。この点は、受身、使役を含めた日本語のボイス体系と密接な関係にある⁷。

よく知られているように、自他の対応がある際、典型的には、他動詞文が成り立てば自動詞文が成り立つ(逆は必ずしも真ではない)。したがって、(9a)は非文法的になる(Cf. 宮島1985)⁸。

- (8) a. 太郎がロープを切った。(他動詞文)
b. ロープが切れた。(自動詞文)
- (9) a. ??太郎はロープを切ったが、ロープは切れなかった。
b. 太郎はロープを切ろうとしたが、ロープは切れなかった。

(8a)と(8b)の関係は、次のように見ることができる。

- (10) YがXをVt(Vt:他動詞)
 ↑他動詞化(項が+1) ↓自動詞化(項が-1)
 XがVi(Vi:自動詞)

⁴ 現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)では、「開通する」323例、「開通される」3例である。

⁵ 例えば、(3)～(5)では「自他対応のリスト」を見ながら答えたとしても、「正解」できない可能性が高い。

⁶ 発表者は3節で取り上げたような場合に自動詞が用いられる理由の説明には、定延(2000)で指摘されている「カビはモデル」の考え方を取り入れた説明が有効であると考えているが、詳細は別項に譲る。

⁷ 本発表で言う「ボイス」は「受身、使役、自他の対応」を含むものである。また、本節の内容は庵(2024 近刊)、野田(1991)と密接な関係を持っている。

⁸ (9a)で意図される意味(ロープの切断を試みたができなかった)を表すには(9b)を使う必要がある。

すなわち、自動詞から他動詞を見ると(=他動詞化)項が1つ増えるのに対し、他動詞から自動詞を見ると(=自動詞化)項が1つ減るといことである。

同様の関係は、使役および受身でも見られる。まず、使役の場合は、次のようになる。

- (11) a. 太郎は娘にピアノを弾かせた。(使役文)
 b. (太郎の)娘がピアノを弾いた。(非使役文)
- (12) a. ??太郎は娘にピアノを弾かせたが、娘は弾かなかった。
 b. 太郎は娘にピアノを弾かせようとしたが、娘は弾かなかった。

使役の場合、通常、使役文が成り立てば対応する非使役文も成り立つ(逆は必ずしも真ではない)。したがって、(12a)は不自然になり、この文で意図されている意味(太郎は娘に働きかけたが娘は反応しなかった)を表すには(12b)のように言う必要がある。

- (13) YがXに・を(Zを)V-(さ)せる⁹

↑使役化(項が+1)

Xが(Zを)V(V:自動詞、他動詞)

(13)に見られるように、非使役文から使役文を見ると、項が1つ増えている。

次に、受身、特に、益岡(1987)の降格受動文に相当する受身文について考える。

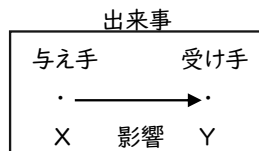


図1 降格受動文

受身は、図1のY(影響の受け手)を主語にして、動詞を有標の受身形に変える統語操作と考えられる。このとき、X(影響の与え手)は背景化するのが普通だが¹⁰、その中でも、Xの背景化が主目的である受身が降格受動文である。

- (14) a. ?コンビニで新しいスナック菓子を発売した。
 b. コンビニで新しいスナック菓子が発売された。
- (15) a. ?先日テレビでおもしろい映画を放映した。
 b. 先日テレビでおもしろい映画が放映された。

例えば、(14a)(15a)のような他動詞文を使うとガ格を特定する必要が生じ、ガ格を欠くと不適格になるのに対し、(14b)(15b)のように受身文にすると、図1のXを特定しなくても文法的な文となる。これが柴谷(2000)などが言う「受身は項を1つ減らす統語操作である」ということの意味である。このことから、受身について次のように言える。

- (16) YがXをV (能動文)

↓受身化(項が-1)

Xが(Zに・によって)V-(ら)れる(受動文)

(16)に見られるように、受動文から能動文を見ると、項が1つ減っている。

⁹ 「Zを」の部分はVが他動詞の場合のみ存在する。また、Vが他動詞のときは「Xに」になる一方、Vが自動詞のときは「Xを」が多いものの「Xを」「Xに」のいずれもあり得る。

¹⁰ このことの反映として、書きことば(BCCWJ)、話しことば(CEJC:日本語日常会話コーパス)のいずれにおいても、図1のXに当たる能動文の動作主は1割程度しか顕現しないという事実がある(庵2022)。

以上を受け、自他の対応がある場合、(17a)のように、自動詞があつて他動詞がない場合は「使役」が¹¹⁾、(17b)のように、他動詞があつて自動詞がない場合は「受身」が使われる。

(17) 自動詞・他動詞と使役・受身

a. 他動詞 YがXをV-(さ)せる :自動詞があつて他動詞がない場合(←使役化)

自動詞 XがV

b. 他動詞 XがYをV :他動詞があつて自動詞がない場合(←受身化)

自動詞 YがV-(さ)れる

この考察を受け、5節では(17)に関わるコーパス調査の結果を示し、6節では調査の結果を踏まえて、「漢語における自他対応」における新しい提案を行う。

5. コーパス調査の結果

本節では、(17)を踏まえて「漢語における自他対応」について考察する前提となる BCCWJ を用いたコーパス調査の結果を述べる。なお、本節の内容は一部庵・宮部(2013)の内容と重なる。

表1は、BCCWJにおいて、「…を～させる」で用いられる二字漢語の頻度順の表である¹²⁾。

表1. 「を～させる」順位

を～させる 順位	を～する 順位		を～させる 数	を～する 数	が～する 数	が～される 数	を～する:を～ させる比率(%)	に～する 数
1	758	向上	566	70	333	0	11.01	
2	380	完成	393	200	779	45	33.73	
3	456	発生	356	150	3963	1	29.64	
4	2430	成功	344	3	433	0	0.86	1522
5	2645	発展	342	1	283	1	0.29	
6	2260	低下	336	5	1323	0	1.47	
7	2025	変化	309	4	929	0	1.28	
8	752	増加	296	80	1883	2	21.28	
8	361	充実	296	208	304	6	41.27	
10	1324	成立	255	4	1963	2	1.54	
11	18	実現	252	2252	709	166	89.94	
12	1098	減少	249	37	1145	0	12.94	
13	146	優先	244	589	118	137	70.71	
14	373	連想	237	203	2	25	46.14	
15	863	納得	228	54	237	3	19.15	158
16	2645	悪化	212	2	515	0	0.93	
17	1166	回転	205	31	118	0	13.14	
18	943	増大	193	50	582	0	20.58	
19	1007	復活	188	45	225	3	19.31	
19	204	移動	188	424	221	4	69.28	

¹¹⁾ 他動詞の代わりに使役形が使われる現象は、(アb)(イb)のように和語にもごく一部見られるが、基本的には漢語に見られるものである。

(ア) a. 車が走る。 b. 太郎が車を走らせる。

(イ) a. 雨が降る。 b. 前線が雨を降らせる。

¹²⁾ 「を～させる」の検索条件は次の通り(短単位検索)。キーより前方1語:語彙素=を&品詞=格助詞、キー:品詞=名詞サ変可能&語種=漢、キーから後方1語:語彙素=為す、キーから後方2語:語彙素=せる。これで表1の上位20語を抽出し、それぞれについて、キーより前方1語:品詞=格助詞、キー:語彙素=向上、キーから後方1語:語彙素=為る(「向上」の場合)で検索して「を～する」「が～する」を抽出し、そこから「を～する(「させる」を除いたもの)」、「が～される」「が～する(「される」を除いたもの)」を抽出した。

表 1 から次のようなことが言える。

- (18) a. 大部分の動詞で「を～する」の使用順位が低い(例外は実現のみ)¹³
- b. 「を～する」が言えない「自動詞」が存在する(発展、低下、変化、成立、悪化)¹⁴
- c. 「が～する」が言えない「他動詞」が存在する(連想)
- d. b, c 以外は「自他同形」とも言えるが、その中でも「を～させる」の方が「を～する」よりも使われる動詞(「する・させる比率」が50%以下)が多い(向上、完成、発生、増加、充実、減少、回転、増大、復活)¹⁵

ここで、(17a)より、bの「自動詞」の場合には義務的に「を～させる」が使われる。一方、dのように、「を～する」で項関係は充足しているにもかかわらず、「を～させる」が用いられる場合を「使役余剰」と言うが(定延 2000)、表 1 は「自他同形」と見ることができるところにおいて、「を～する」という「使役整合」よりも「を～させる」という「使役余剰」の方が使われやすいことを示している¹⁶。

一方、「を～する」の頻度順の表は表2の通りである¹⁷。

表 2. 「を～する」順位

する全体 順位	を～させ る順位		を～する	を～させ る	が～する	が～され る	を～する：を～ させる比率(%)
1	154	利用	8166	27	291	212	99.67
2	140	実施	6316	29	448	984	99.54
3	150	使用	4547	28	231	379	99.39
4	85	確認	4399	45	109	685	98.99
5	957	意味	4062	2	96	2	99.95
6	272	選択	3925	13	71	190	99.67
7	206	推進	3860	18	43	158	99.54
8	184	紹介	3634	21	108	335	99.43
9	178	作成	3363	22	288	307	99.35
10	190	提供	3247	20	257	198	99.39
11	517	確保	3198	6	17	309	99.81
12	33	理解	2962	93	198	102	96.96
13	309	開始	2555	11	57	759	99.57
14	286	購入	2415	12	111	11	99.51
15	125	維持	2398	32	19	186	98.68
16	517	設置	2318	6	161	841	99.74
17	462	設定	2284	7	72	476	99.69
18	11	実現	2251	252	707	166	89.93
19	178	説明	2191	22	260	60	99.01
20	309	検討	2130	11	29	251	99.49

¹³ 表 1 の「が～する」のガ格にはほぼ全ての例において無情物が来ている。これは、表 1 の動詞が自他対応を持つことを示している(他動詞であり自動詞を持たない「連想」を除く)。

¹⁴ 「成功」も「を～する」を取らないが、これは「成功する」が二格を取るため、事情が異なる。

¹⁵ 「納得」は二格も取るので、ここには含めていない。

¹⁶ 定延(2000:4章)で詳述されているように、「使役余剰」「使役整合」という見方は「ピリヤードモデル的」デキゴト観によるもので、日本語には必ずしも当てはまらない。

¹⁷ 表 2 の「が～する」のガ格は表 2 の「が～される」、表 1 の「が～する・される」との比較のためにも、非動作主用法のもののみカウントすべきだが、今回はこの点の精査ができていないことを断っておく。表 1 と表 2 の比較で、表 1 の「が～する」のガ格に対応するのは表 2 の「が～される」のガ格と考えていただきたい。

表 2 から次のようなことが言える。

- (19) a. 大部分の動詞で「を～させる」の使用順位が低い(例外は実現のみ)
- b. 大部分の動詞が「他動詞」で、自動詞用法を持たない¹⁸
- c. 「を～させる」の用法をほとんど持たない(「する・させる比率」がほぼ 100%)¹⁹

(19a)(19b)は(18a)と同趣旨で、「を～する」という「他動詞用法」において「自他対応を持つ動詞」の比率は(かなり)低く、頻度が高いのは「自動詞用法を持たない他動詞」である²⁰。また、(19c)は「自動詞用法を持たない他動詞」においては「使役余剰」は現れにくいことを示している²¹。次節では、これらの調査結果などをもとに、「漢語における自他対応」に関する新たな提案を行う。

6. 「漢語における自他の対応」に関する新提案

本発表のテーマである「自他の対応」は和語について述べられることが多い。和語における自他の対応に関する教授上のポイントは形態的な点(語形の暗記)に集中しており、3 節ではこの点に問題があることを指摘した。

和語における自他の対応は、形態的に複雑なのは確かだが、覚えるべき対象ははっきりしている。一方、漢語における自他対応のあり方は「正解」が確定していない点で和語の場合よりも複雑である²²。

日本語には未だに学習者向けの標準的な学習辞書が存在しない。漢語サ変動詞の自他(以下、漢語の自他)などはそうした辞書に必ず載せるべき情報だが、現状でもし学習者自力で漢語の自他を調べようとするなら、国語辞典を引くしかない。しかし、先行研究で指摘されているように、自他の認定において辞書間でゆれが大きく、規範が確定できない状況にある。

さらに、中国語と日本語の同形ないしそれに近い語彙の間で自他に関するズレが大きいことなどもあり(庵 2010、劉 2021 参照)。「漢語の自他」は上級学習者が論文などを書く際の隠れた学習困難点となっている(中川 2005 も参照)。本発表では、こうした点を受けて、次の提案を行う。

(20) 漢語サ変動詞の自他(漢語の自他)を次のように考える。

- a. 「が～する」が言えて「を～する」が言えない「自動詞」の「他動詞」形は「を～させる」
- b. 「が～する」が言えず「を～する」が言える「他動詞」の「自動詞」形は「が～される」
- c. a, b 以外で「が～する」が言える「自他両用動詞」の「他動詞」形は「を～させる」
- d. 次の5語(開店、決定、終了、中断、紛失)はcの例外で、「他動詞」形は「を～する」

この提案は、「自動詞」と「自他両用動詞」の区別をほぼ廃止し、「が～する」(ガ格は無情物)が言える場合の他動詞形は原則として全て「を～させる」とするというものである²³。これにより、学習者の学習負担をかなり減らすことが可能になる。ただし、(20d)の5語は「を～させる」を使うと使役的に解釈されやすいため、「を～する」を使う方がよい。

¹⁸ 表 2 の「が～する」のガ格はヲ格より出現頻度も低いですが、現れる場合でもほとんどが有情物であり、これらの動詞は無情物主語の自動詞用法を持たないと言える(「実現」を除く)。

¹⁹ 自他両用動詞の「実現」を除く。なお、「自動詞用法を持たない他動詞」の「を～させる」形は「使役」用法になるが、その数が非常に少ないことは、書き言葉における「させる」はほとんどが「他動詞」を作るために使われており、「使役」としては使われていないという森(2012)の指摘を裏付けるものでもある。

²⁰ (17b)から、これらの動詞が自動詞用法を必要とする際には受身形(が～される)が使われる。

²¹ 同趣旨のことが定延(2000:134)などでも述べられている。

²² 大規模コーパスにおける使用実態をもとに漢語の自他を定めようとする張(2014)のような論考もある。

²³ 「太郎が入院する」のような意志的自動詞の場合も「太郎を入院させる」という「を～させる」形になるが、この場合は「他動詞」ではなく「使役」なので、ここでは一応別のものとしておく。

7. 初級文法項目の再学習としての「漢語における自他対応」

前節では、漢語サ変動詞の自他についての新提案を行った。本節では、この提案が本パネルセッションの趣旨である「初級文法項目の再学習」に当たるものである点について述べる。

2節で、初級における自他の対応について、格助詞の選択、自動詞形、他動詞形の選択と合わせて、1) 自動詞を用いると出来事が自然発生的に表現される、2) 他動詞を用いると動作主が含意される、という点が教えられていることを指摘した。この点を念頭に(21)(22)を見てみよう。

(21) 八十三歳の船田[元衆議院議長]が病床にあり、同派の影響力が低下した。

(阿部牧郎「悲しまぬおれたち」LBc9_00084²⁴)

(22) ブリヂストンの石橋家は兄弟二人、途中から三人で家業しまや足袋を発展させた。

(森川英正「トップ・マネジメントの経営史」LBk3_00143)

すると、自動詞文(「…が Vi」Vi:自動詞)では出来事が自然発生的に表現され、他動詞文(「…を Vt」Vt:他動詞)では動作主の存在が含意されるという特徴は、(21)(22)においても同様に観察される。すなわち、(1)(2)と(21)(22)の違いは語彙の難易度だけであり、文法的には初級で扱った内容の再確認と考えることができるのである。

このように、本発表の主要テーマである6節の内容は初級文法項目の再学習と考えることができるが、初級とやや異なるところもある。

(23) a. ?陽ざしが肌を焼いた。

b. ok 陽ざして肌が焼けた。

初級の学習項目は基本的に話しことばであり、話しことばでは(23a)のような「物主語の他動詞文」は避けられ、(23b)のような自動詞文が使われる。しかし、アカデミック・ライティングの対象となるタイプの書きことばでは(24)のような「物主語の他動詞文」は普通に使われる²⁵。

(24) 木材は水分の吸放出によって、その寸法を変化させる。

(中井毅尚「木質の形成」PB36_00069)

これとの関連で、中国語話者には物主語の他動詞文や使役表現を多用しやすい傾向があり、それが不自然さの原因になることがあるので注意が必要である(庵・張 2017)。

(25) そのほかの問題[として]はもし晩婚化が続ければ(→続けば)、若い年齢の出生率を低下させて(→が低下して)、それにとまなう晩産化や無産化、少子化が[起こることが]挙げられる。(C23-2²⁶)

8. おわりに

本発表では、「自他の対応」をテーマに、初級文法項目の再学習という観点から、中上級以上で考えるべき内容について取り上げた。その中でも論文などアカデミック・ライティングを行う際の隠れた困難点となっている「漢語における自他対応」について、「自動詞」と「自他両用動詞」の区別を(事実上)廃止するという提案を行った。この提案の妥当性について、今回はコーパスにおける分布を主な基準としたが、今後は母語話者に対するアンケート調査なども行い、提案の妥当性を高めていきたい。

²⁴ BCCWJ のサンプル ID。

²⁵ 話しことばなら(24)の代わりに(24')のような自動詞文が使われると思われる。

(24') 水分の吸放出によって、木材の寸法が変化する。

²⁶ これは JCK 作文コーパスの ID で、C は中国語話者を表す。

【参考文献】

- 庵功雄(2010)「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因—非対格自動詞の場合を中心に—」『日本語教育』146
- 庵功雄(2013)「「文法」でできること」「たかが「の」、されど「の」」『日本語教育、日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄(2022)「母語話者コーパスから見た日本語の受身文」庵功雄編『日本語受身文の新しい捉え方』くろしお出版
- 庵功雄(2024 近刊)「産出のための文法から見た日本語のボイス表現」『言語文化』61、一橋大学
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・宮部真由美(2013)「二字漢語動名詞の使用実態に関する報告:「中納言」を用いて」『一橋大学国際教育センター紀要』4、一橋大学
- 庵功雄・張志剛(2017)「第1章 正確で自然な立場の選び方」石黒圭編『現場に役立つ日本語教育研究 3 わかりやすく書ける文法シラバス』くろしお出版
- 菊地康人(2006)「受難の「んです」を救えるか」『月刊言語』35-12
- 小林典子(1996)「相対自動詞による結果・状態の表現」『文芸言語研究(言語篇)』29、筑波大学
- 定延利之(2000)『認知言語論』大修館書店
- 柴谷方良(2000)「3ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法I 文の骨格』岩波書店
- 張志剛(2014)『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
- 寺村秀夫(1976)「「ナル」表現と「スル」表現」寺村秀夫(1993)『寺村秀夫論文集II』くろしお出版に再録
- 中川正之(2005)『漢語からみえる世界と世間』岩波書店
- 野田尚史(1991)「文法的ヴォイスと語彙的ヴォイスの関係」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版
- 宮島達夫(1985)「「ドアをあけたが、あかなかった」」『計量国語学』14-8
- 森篤嗣(2012)「使役における体系と現実の言語使用」『日本語文法』12-1
- 劉倩卿(2021)「中国語話者を対象とする漢語動詞の教育のための総合的研究」2021年度一橋大学言語社会研究科博士論文
- Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus*. くろしお出版